
Fate zero ～もしあの魔術師に子供の頃からの親友がいたら～

マリオネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e z e r o ーもしあの魔術師に子供の頃からの親友がいたらー

【Nコード】

N 5 2 3 1 B A

【作者名】

マリオネット

【あらすじ】

もしあの魔術師に子供の頃から交流がある親友がいたら？ その男が魔術師らしくなかったら？ その男によって強い影響を受けていたら？ そんな『もしも』
キャラ崩壊、特にケイネス先生は根本あら崩壊しているので原作のケイネス先生が好きな人は注意して下さい

始まる前から前途多難

プロローグ（始まる前から前途多難）

暗い部屋というのはそれだけで不気味でそれがまるで典型的な魔術師のようだ。

俺は魔術師に嫌われている。目の敵にされていると言ってもいいだろう。

暗くてジメジメした魔術師達の本拠地である時計台に一歩足を踏み入れれば袋叩き……にはされずに嫌そ

うな目で、雰囲気で歓迎される。

歓迎するなら拍手か何かで大々的に迎え入れて貰いたいものだ。

まあ、実際にそんなことされたら一目散に逃げ出すけど。

『待たせたね』

ほら、ちよつと声をかけられただけで身体に緊張が走る。

部屋の何処からか聞こえて来る声は感情のない平坦なもの。本来なら機械的とても表現すべきなんだろうが、ここは人形的とても表しておこう。こいつらはほら、機械とか大嫌いだから。

『研究資料、魔術刻印、脳髓を本人の物と確認できたよ。報酬は口座に振り込ませておいた』

魔術師としての最高の名誉を受けた結果がホルマリン漬けとは……何だか人生への皮肉のようだ。

『封印指定』

それは魔術師にとって最高の名誉であると同時に最大の厄介事だ。

継承不可能な一代限り、学問では決して辿り着けないモノ、要するに生まれ持った才能。

それを『貴重品』として保護という名目で保管、要するにホルマリン漬け。

本人の意思関係ないところが実に魔術師っぽい。

だから魔術師は『封印指定』を受けると時計台から逃げ出す。

そりゃ誰だってホルマリン漬けにはされたくない、逃げ出すのは当然だ。

だが逃げる者あらば、追う者がいるのもまた当然。

『執行者』

封印指定を受けて逃亡した魔術師を掴まえる魔術師。

掴まえるなんて言ってるが生かしたみ連れて来ることは殆どない。

『脳髄』『魔術刻印』この二つが無事なら後はどうでもいい。あと研究資料も付いてると報酬に色がつく。

『相変わらず見事なものだ。どうすればそこまで……』

『企業秘密』

『企業じゃないだろ』

「だったら個人情報。フリーランスは色々秘密にしないとイケないんだよ」

『……そういうことにしておこう。ところで……』

「ああ、そっちは見つからなかった」

『君をもつてしてもか……』

「じゃっ、次はもうちょつと楽な仕事よろしく」

さて、今のやりとりで俺が魔術師達に嫌われている理由がお分かり頂けただろう。

魔術師としての最高の名誉である『封印指定』。時計台にいる魔術師達の多くはその『封印指定』を夢見ている。だからそれを狩る『執行者』である俺が嫌われるのは当然のことだ。

そんな非歓迎モードの中で伸び伸びできる程図太くはないのでさつさと帰りたいが、ちよつと寄っておかないといけない所がある。先程より足取りは重くない。何せこれから行くのはこの時計台の中で数少ない急速が取れる場所だからな。

この時間になると授業も終わっているのか生徒の数も殆どない。ここら辺は普通の学校とは変わらないな、と自分の余りいい思い出のない学生時代を思い出しながら曲がり角を曲がると

「うわあっ!？」

勢いよく走って来た台車にぶつかりそうになった。俺にぶつかりそこねた台車は少し進んだ後、台車を押していた少年の必死のブレーキによって止まる。

「あつ、あれ？ 確か今……」

「おい」

「わっ!？」

後ろから話しかけると少年は此方が申し訳ない程に勢いよく驚いた。大きなリアクション、何ともからかいがいのある少年だ。

「なつ、何で後ろに!？ 今、前にいた筈なのに……ていうかお前は執行者の!」

「言いたいこと多いな。とりあえず他に言うことないのか？」

「……ごめん」

魔術師の雛にしても随分素直な奴だ。このまま魔術師になったら苦労するな……いや、なれるかも怪しいな。

「これから気をつける。あとこの大きな荷物はなんだ？」

「そつ、それはあんたには関係ないだろ」

「関係ないけど気になる。ていうか都合が悪くなったからって急に強気になるな」

「とにかく僕は急いでるんだ！」

少年は一方的に会話を断ち切って行ってしまった。あの急ぎよう、来た方向、そして通過した時の感覚。

「ふーむ……まあ、いいか」

借りに盗られたとしても管理が杜撰な方が悪い。

どんな理由があっても盗み正当化されることはないが、この世界は盗まれた方が間抜けな世界だ。

だが一応身分の確認位はしておくか。すれ違った際に抜いておいた財布を漁る。言っただろ？ 盗まれた方が間抜けなんだ。

魔術的な仕組みが何もない……あいつ本当に魔術師か？ と疑問を抱えながら財布を漁ると学生書がすぐに出て来た。

「ウェイバー・ベルベット……ああ、やっぱりあいつの教え子か」

財布は中身を保護した後、外側は投げ捨てておいた。そのうち気付いて取りにくるだろう。

少し暖かくなった財布を抱いて少し歩くと目的地に到着した。相変わらずそのドアには無駄な威圧感がある。

「よー、今日も不機嫌？」

しかし、そんなことは気にもしない。ノックをした後に返事も聞かずに入った部屋の中は妙に片付いていた。

元から整理された部屋だったが至る所に飾ってあった物がなくなっ

ている。

随分とすつきりしてしまったが、さっきの奴がつつり盗んでいったのか？

「貴様は本当に人の話を聞かんな」

書斎の方からこの部屋の主の声がする。その声はいつものように不機嫌そうだ。

「ノックをしたなら返事を待てと何度言わせる気だ」

イライラしながらケイネス・エルロイ・アーチボルトが奥の書斎から出て来た。

「俺とお前の仲だろ」

「ノックしなくても許される関係とはどんや関係だ」

「ノックしないで部屋に入ると怒るけど結局許しちゃう関係」

「そのままではないか！」

どうせ許すのにケイネスは眉間に鉛筆でも挟めそうな皺を刻みながら叫ぶ。

ケイネスも実にからかいがいのある奴だ。

「そんなことより随分と前衛的な模様替えだな？ ソウラに何か言われたか？」

「人の婚約者と呼び捨てで呼ぶとはどういう了見だ」

「そういうのいいから」

「大事なことだ！」

分かったからいちいち至近距離で叫ぶな。

「貴様とソウラは親し過ぎる。未来の夫である私に一言入れてから二人で出かけるとはどういう見だ！」

「一言入れなきゃ怒るだろ」

「二人で出かけるなど言ってるんだ！」

「お前どんだけ不安抱えてんだよ」

「なっ、不安などある訳あるまい！ 見るこのペンダントを！ ソウラが私の為に買って来てくれたのだぞ！」

ケイネスは首にかけていたペンダントの細い鎖が千切れる位の勢いで突き出す。

ロボロスを型どったペンダントは光に反射して銀色に輝きを放っている。

「あつ、それ俺が選んだやつ」

「選ぶな！」

「ちなみに金を出したのも俺」

「金を出すな！」

「プレゼントすると喜ぶってアドバイスしたのも俺」

「シイイイイット！！」

耐えかねたケイネスはペンダントの鎖を引き千切った。普段のひ弱さからは想像できない荒々しさだ。

「プレゼントする意思すらソウラのものではないのか！」

「因みに鎖は別売りだったからソウラが買ったぞ」

「……………」

まるで窓ガラスを割ってしまった子供のようにケイネスがオロオロし始める。

暫くその様を眺めた後、魔術で直せよとアドバイスしたらすつこい怒られた。

こんな喜怒哀楽が激しい男が時計台の一級講師だっていうのだから解らないものだ。

俺の前では見せない部分で上手くやってるのだろうが……見える部分しか知らない俺からすると驚くしかない。

「聖杯戦争？」

模様替えの理由、それにもまた驚き、そして俺の知らない一面だった。

「そう、聖杯戦争だ」

俺が聞かずとも聖杯戦争のことを知らないと言っただけで自信満々で説明を始めた。

説明好き、という所は確かに講師に向いているかもしれない。

日本……冬木……七人のマスター……七騎のサーヴァント……英雄……三角から成る令呪……聖杯によって配分……願いを叶える……。

ケイネスは自慢気に長ったらく話しているが半分も頭に入っていない。

俺は生徒ではないのだからそんな熱心に語られてもアクビをするだけだ。

「欠伸をするな、大事なところだぞ」

これだよ。

「要するに日本の冬木って所に行くってことだな？」

「目的を省く奴が何処にいる。私は……」

「もういいつつの」

こいつ講義の時もこんな感じなのか？　だったら生徒は不幸としか言いようがない。こいつの話はローレライの唄より強力だ。

「それ使えば無傷で勝てるんじゃないか？」

「当然だ。私の一月礼髓液《ヴォールメン・ハイドラグラム》は如何なる剣も防ぎ、如何なる盾も斬り捨てることができるのだから」

しまった、眠気に耐えてる間に話が変わっていたようだ。

「貴様に指摘された変化が単調である弱点は膜を二重にすることで解消した。そのせいで重量は増えたが、それだけの価値は生まれた」

自分の優秀さをここぞとばかりにアピールしてくる。自分の才能を誇るのはいい、だが魔術師が自分の魔術礼装のことをベラベラ喋っているのか。

「防御に特化させればサーウゝアントの一撃にすら耐えることができるだろう」

「あーっ、そりゃいいが……」

とりあえず俺が少しでも興味がある話にもっていきこつ。

「準備万端なのはいいが……そもそもなんで聖杯戦争に参加するんだ？」

一応興味がある内容の質問だから眠くならない筈だ。
聖杯に願うような願いがこいつにあるとはどうも思えない。

まあ、それもあくまで俺の知ってるケイネスに関しては、だが。

「理由？ 何、簡単なことだ」

「戦う姿をソウラに見せてカッコいい男をアピール、なんかじゃないよな」

「……………」

「なんだその変な汗は」

広い額に浮かび上がった汗をぬぐいながらケイネスは聖杯戦争に参加する理由を話始めた。何を言われても説得力ないけどな。

「箔を付ける為？」

聖杯に叶えて欲しい願いはない。

ケイネスが聖杯戦争に参加する理由とは研究タイプの自分の経歴に戦歴という箔を付ける為だそうだ。
取り合えず言うこととおくか。

「ばーか」

スッキリ。

しかし、逆にケイネスの顔には皺が身体中から寄って来た。

「私は貴様の何万倍も賢い！」

「その発言が既に馬鹿だ。そんな下らない理由で……………」

「下らなくはない！」

「お前みたいな頭の手から爪先までガチガチの魔術師が戦場に出た

らどうなるか分かってるのか？」

「ふんっ！ どうなるというのだ？」

黙って拳を振り上げる。

「分かった、分かったからもういい！」

ケイネス早くもギブアップ。

後学の為に一発位は殴っておきたいんだが……。

「魔術師同士とはいえ殺し合いなんてこんなもんだ。きっとお前が嫌いな現代兵器を使ってくる奴も出てくるぞ」

「銃など私に……」

「建物を爆弾で破壊」

そんな奴がいるか、とケイネスは言いたそうだが言い切れないのもどかしそうだ。

「この部屋にあった魔術礼装を全部置ける場所は限られる。魔術師が自分の工房を断定されていいのか？」

ケイネスは面白くなさそうな顔をしているが同時に納得もしているようだ。

何の願いだって叶うというなら、そりゃなんだってするさ。

「……どうすればいいと思う？」

若干時間はかかるが自分の非を認めてアドバイスを求めることができるのは優秀な証か……。

取り合えず月霊脊髄以外の魔術礼装は持って行くなとアドバイス、
というか命令しておいた。

趣味で集めた物を敵に見せびらかそうとするな。

「ホテルも変えるべきだろうか？」

「工房を構えそんな場所はリストアップされてる可能性もあるしな」

「ふむ……ルームサービスが受けられないのは残念だが一軒家を買
い取るべきか？」

暫くケイネスと聖杯戦争を生き残る為に色々考えた、じゃなくて教
えた。

これで無様に死ぬ可能性も低くなっただろう。

まあ、聞いた話では基本的に聖杯戦争はサーウ、アント同士の戦い
でマスターが戦うのは緊急事態のようだし大丈夫か？

あつ、そーいや割りと大事なことを聞くの忘れてた。

「お前なんの英霊呼び出すんだ？」

過去に生きた伝説の中の登場人物である『英雄』。

聖杯戦争ではその強大な存在である英雄をサーウ、アントとしてし
て使途する。ただの使い魔とは比べ物にならない戦闘力を持つ人間
では太刀打ちすることは出来ない神秘の存在……とケイネスが自分
で言ってた。

使い魔というよりは配下となる兵士といったところだろう。そう
なると何を召喚するかは大事だ。

ケイネスの話では英雄の縁の物を触媒にして召喚するそうだが……
きつと凄まじくお値段張るんだろうな、一級講師って儲かるんだろ
うか？

「よくぞ聞いてくれた」

聞かなきゃよかった。

「私が呼び出す英雄、それはかつて地の果てまでを征服した英雄……征服王イスカンドルだ」

伝説には詳しくないがイスカンドルの名は知っている。

取り合えず俺が唯一知ってるイスカンドルに対しての情報を言っておくか。

「あの男色家で有名な」

「どうして貴様はそんな不安を煽るようなことを言う！」

俺の知ってるイスカンドルの情報ってこれだけなんだよ。

このままだと長ったらしくイスカンドルの話をされそうだから話を反らそう。

「触媒には何を使うんだ？」

「征服王のマントの一片だがそんなことは……」

「取り寄せたのか？」

「話を反らすな……ああ、今日中に届く筈だ」

届く筈というのでさっきぶつかりかけたウェイバーを思い出す。

あれが運んでいたのはもしかして……マントの一片があんだけ大きな箱に？

「講師だからって生徒をこき使うのはどうかと思うぞ」

「……なんの話をしている？」

「ウェイバーって奴に運ばせてるんだろ？」

「……ウェイバー・ベルベットの名前がどうして出てくるのだ？」

「さっきそれっぽい運んできた」

「……………」

ケイネスは青白いで脂っこい汗を大量にかいた後に部屋から飛び出して行った。

どうやらケイネスの聖杯戦争は始まる前から前途多難のようだ。

「時計塔備品係のミスだ……」

暫くした後には帰ってきたケイネスは汗まみれで落ち込んでいる。

ほっとけば勝手に立ち直るだろうが一応友人として励ましておいてやろう。

「他人任せにするからだ」

「嘘でも優しい言葉を吐けんのか」

「間抜け」

「ええい、その通りだ！ 私は間抜けだ！ 他人任せにした私はどうしようもない愚かだった！」

今度は触媒を自分で見つけてみせる！ とケイネスは意気込んでいる。

相変わらず厳しい言葉を送るとすぐに立ち直るな。

「これから私は触媒を探しに出かける！ 貴様に構っている暇はない、さっさと帰れ！」

「そうだな、マジで忙しそうだから渡す物渡したら帰るわ」

ケイネスから警戒心の好奇心が凌ぎ合っているのが手に取るように分かる。

俺の渡す物の半分はケイネスによって処分されるか、もう半分はこの部屋に飾る程に気にいるかのどちらかだ。

はたして気にいるか、その場で握り潰すか、ちょっとドキドキしながらポケットから物を出した。

「ジャジャー、取り出したるわこの眼鏡」

「魔眼殺しか」

「たまには俺にも説明させろよ!」

「余計な手間を省いてやったんだ」

この野郎、さつき説明中に欠伸したこと根に持ってやがるな。しかし、これがただの魔眼殺しと思ったら大間違いだぞ。

「しかし、この魔眼殺し!」

「ふむ、かけた者の魔眼を抑制するのではなく、外部からの視覚から訴えかける魔術を防ぐのか……これだけ強力ならば吸血鬼の魔力の魔眼すら防ぎ切れるな。ふむ、なかなかいいものではないか」

「えーえーその通りでございますよ」

俺が元気づける為に発した棘のある言葉も根に持ってやがるな。

「女性用に作った物らしいし、ソウラにあげたらどうだ?」

「ソウラに? ソウラに……ふむ、悪くないな」

今のケイネスの顔は生徒には見せられないな。だらしない以前に単純に気持ち悪いし。

「似合うだけではなく万が一の場合の保険にもなるかもしれんしな」

「ん? 何、ソウラも聖杯戦争行くのか?」

「ふつ……、これには勿論深い理由がある」

ヤバイ、この顔は今すぐにでも自慢話を始める顔だ。何を自慢し始めるのかは分からないが、自分の有能さをアピールしようとしているには違いない。

「じゃっ、俺は帰る！ ご武運を願ってるぞ！」

「なっ、待て！ 話を聞いておいて聞かないとは何事だ！ おい、ジョン！」

後ろで何やら叫んでいる声が聞こえるが、全く後ろめたさを感じないのでさっさと逃げ出した。

ケイネス、あいつはいい奴ではあるんだが話が長く、そしてその長さの原因の殆どが自慢話つてのがたまに傷だ。

きつとあいつが死んだら、もう自慢話も聞けないのか、としみじみするんだろうな。まあ、その時が来たらその時に悲しむとしよう。しかし、どういうことだ？ ケイネスが間違うとも思えない、そうなる俺の勘違いか？

自分の掌を見る。そこには薄く灰色の剣のような形をした痣らしき物が浮かび上がっている。

突然浮かび上がったこれをケイネスに聞きに来たのだが、流れで聞くことができた……と書いていたんだが。

「三角ある筈なんだがな」

掌の令呪らしき痣には一角しか存在しない。召喚する前に既に二角使って……なんてことはないよな？

やはりただの勘違いか？ しかし、タイミング的に間違いない気がするな……。

「……冬木か」

一度観光で訪れておくべきか？

プロローグ（始まる前から前途多難）

始めまして、マリオネットといいます。

子供の頃からの付き合いのある馬鹿な親友がいたらケイネス先生もハッピーになるんじゃない？ という考えの元に書かれている小説です。

シリアスなzeroですが、この物語ではできるだけ馬鹿騒ぎさせたいと思います。

もし気が向いたら感想などをよろしくお願いします。 それでは失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231ba/>

Fate zero ～もしあの魔術師に子供の頃からの親友がいたら～

2012年1月14日15時55分発行